

高校人国記

広島女学院高校(広島市中区)③

アート・文芸

人間存在探る



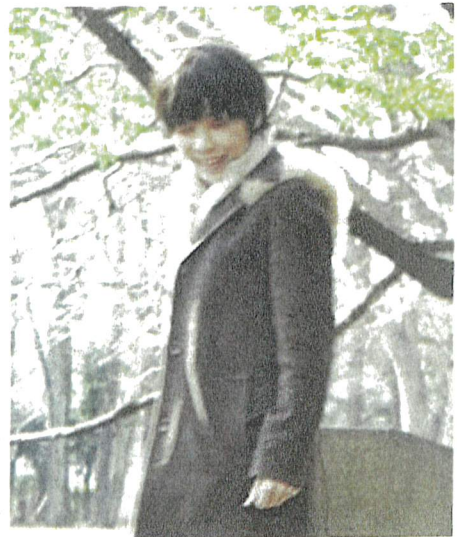
ゲインズ記念ホールの前に立つN・B・ゲインズの胸像



メモ



<かつての教師>N・B・ゲインズ (1860~1932年) 米ケンタッキー州出身。南メソジスト教会の宣教師募集に応じて来日し、女学院の前身・私立英和女学校の初代校長に就任。34年間の在任中、学校の基礎を築き、退任後も広島にとどまった。「校母」と呼ばれている▽日野原善輔 (1877~1958年) 萩市出身。牧師。第3代校長。医師・日野原重明の父▽杉村春子 (1906~1997年) 広島市出身。新劇女優。東京都名誉市民。築地小劇場に入る前の一時期、女学院で音楽の代用教員をしていた。



現代美術家 内藤礼
Photo: Satoshi Nagare

「私はクリスチャンではありませんが、女学院での日々の礼拝と生活の中で『愛』について触れ続けたのは、とても大きなこととです。現代美術家内藤礼(57)の回想だ。1991(平成3)年のインスタレーション「地上にひとつの場所を」はパリやニューヨークでも公開され、世界的な注目を集めた。

真つ暗な室内にテントが1張り。中にオブジェなどが並ぶ。1人ずつ入って、この世に存在していることの「恩寵」を体感してもらおう仕掛けだ。作品にはやがて「他者がいることが自分の幸福」という視点が加わる。人間存在の根源を探り続ける彼女にとって極めて重い「愛」という言葉。そこには物質的な繁栄への鋭い問いも感じられる。2010(同22)年には瀬戸内海の豊島(香川県)に風や光、湧き水を取り込んだ美術館を設けた。今年、第60回毎日芸術賞に選ばれ、今日25日に贈呈式がある。



笹岡啓子

写真家笹岡啓子(40)は高校時代、写真部顧問だった物理の教師から海外協力隊の写真のスライドで見せられ、テレビとは違う新鮮さを覚えた。写真部では「好き勝手に

「日々の礼拝と生活で『愛』に触れた」

撮って好き勝手に現像し、とても楽しかったという。東京造形大時代仲間とギャラリーを構え制作や発表の場とした。広島を離れて気付いたのが周囲の原爆への無関心と「広島の特異性」。中学高校の平和学習で学んだこの意味も分かっていた。以後、帰省のたびに平和記念公園を訪れて「あの日」を念頭に撮影。独特のモノクロ写真集「PARK CITY」を発表して高い評価を得た。東日本大震災後の東北を撮った写真集は第23回林忠彦賞に輝いた。



藤井美加子

日本画家藤井美加子(53)は高校1年で画家を目指し、休み時間に毎日美術室で描き続けた。大学受験は睡眠3時間で頑張った。武蔵野美術大では店舗の内装のアルバイトで学費を稼いだ。こんな頑張り根底には「女学院精神」があったという。母校のゲインズ記念ホールの壁画も美術を選択した仲間と共同制作した。「ワカコ酒」が大ヒットした漫画家新久千映(38)、イラストレーターみしまゆかり(37)も卒業生。



堀越ゆき

文学では堀越ゆき(47)が異色。大手監査法人に勤めながら、電子書籍で知った米国の奴隷女性の手記を翻訳。「ある奴隷少女に起こった出来事」として出版した。13(同25)年、啓文社の文芸書大賞を受賞。文庫本になると古典名作と並んで「新潮文庫100冊」に入り、ベストセラーに。奴隷少女が性関係を迫る所有者から逃れて屋根裏に潜伏し、奴隷制のない北部へ命懸けで脱出する壮絶な実話。虐げられていた黒人と

「社会の期待で自ら才能つぶさないで」

共に、所有者の白人が奴隷制で人間性を失っていた実態も描かれている。原作者や自身の生き方を踏まえ後輩に訴える。「良い奥さん、良いお母さんに」という親や社会の期待を受け、才能を自らの手で握りつぶさないで。あなたが自分の才能を信じたら、社会を変えられる大人になれるかもしれないのです」

平安寿子(65)は1999(同11)年、オール読み物新人賞を受賞してデビュー。以後2、3冊のペースで書いた。幼い頃から本ばかり読む子だった。高校ではノートに書いていた文章を隣の席の子が読んで「あなた、すごい」と言ってくれた。「先生よりもこの子に褒めてもらいたくて」書きまくった。後に職業作家となって編集者の必要性を知った時、「あの子が私の中のものを引っ張り出してくれた最初の編集者だった。自分が育っていくうえで、他人がいかに大切に気付いた」という。



井野口慧子

井野口慧子(74)は「人として使命を全うする生き方を女学院で学んだ」という。詩誌「水声」を27年間発行。詩集も多い。2003(同15)年には女学院同窓生の歌どんなに時が流れても」を作詞した。その中に初代校長N・B・ゲインズに触れた一節がある。「ゲインズ ゲインズ わたしもあなたに続く、一粒の種」敬称略(客員編集委員・富沢佐一)

今回は2月1日に掲載します。

「高校人国記」は広島、山口両県を中心に回って、高校ごとに話題の卒業生を紹介していきます。各校の情報をメールなどで寄せください。宛先は〒730-0867 広島市中区土橋町7-1、中国新聞編集局「高校人国記」係。メールは、bokou@chugoku-np.co.jp